

InterBEE 2016 レポート(その1)

全体概要とイベント関係

石田 武久

はじめに

Inter BEE は、技術オリンピックとも言われ日本の放送技術力の高さを世界に発信した 1964 年開催の東京オリンピックの翌年、「放送機器展」として始まった。その後、様々な経緯をたどりつつ、日本のみでなく世界の放送を支える多種多様な技術を世に出しつつ 2014 年には創設 50 周年を記念した。今や米国 NAB、欧州 IBC に並ぶ放送界最大のイベントに成長している。

この半世紀の間に、放送メディアは白黒からカラーへ、標準テレビ (SDTV) からハイビジョン (HDTV) へ、そしてアナログからデジタルへと成長発展を重ねてきた。そして最近では、超高精細度放送時代を迎え、ついに今年の 8 月には BS による 4K、8K 試験放送も始まった。最近の NAB や IBC などの国際的展示会を見ても、高品質、高度の放送を支える制作技術や配信ネットワーク、インフラさらにユーザーの視聴環境は大きく変わり成長している。また Inter BEE の直前に幕張メッセで開かれた産業分野、民生分野の展示会である CEATEC においては、人工知能 AI の進展、IOT に見られるようなあらゆる環境下でのネットワーク化の進展など、大きな技術イノベーションが進んでいる。これらの動向、潮流も放送界に大きな影響を与えていくことは間違いない。

このような技術的潮流、社会の状況下、開かれた今年の Inter BEE における技術の進展や動向を紹介して行きたい。本号では今大会の全体的な概要、フォーラムやコンファレンスをメインに、次号以降で各社の出展物などについて、企業、分野別に概略を紹介して行きたい。

今大会の概要

今年 52 回目となる InterBEE2016 は 11 月 16 日から 18 日まで、幕張メッセで盛況に開催された。今回、出展者数は昨年の 996 を超え、過去最多の 1090 社・団体 (うち海外 34 カ国・地域から 593 社) を数え、登録来場者数は晴天にも恵まれ過去最多の 38,047 人 (昨年 35,646 人) を迎えた。出展者数の増加に合わせ機器展示会場は、昨年より 1 ホール分広くなり第 2 ホールから第 8 ホールまでをいっぱいを使い「プロオーディオ」、「映像表現 / プロライティング」、「映像制作 / 放送関連機材」、「ICT / クロスメディア」の 4 部門に分かれ、多種多様な展示物が公開していた。各社のブースの場所、配置も従来とかなり変わりちょっと戸惑うこともあった。

フォーラム・コンファレンス関係

フォーラムやコンファレンスも従来以上に多彩で、それぞれテーマが時流を反映しておりいずれも盛況だった。

新たな半世紀を刻む 52 回目の大会開会を告げる恒例のオープニングセレモニーは、国際展示場の中央エントランスロビーで催され、主催の JEITA (電子情報技術産業会) の川上常務理事の挨拶に続き、総務省の吉田大臣官房審議官と経済産業省の吉本情報政策統括調整官の揃い踏み挨拶があった。続いて海外からの要人の米国大使館のエリック・キッシュ氏、欧州の IABM (国際放送機器協会) のピーター・ブルース氏、ブラジル放送協会のオリンピオ・フランコ会長らによるテープカットが行われ大会開会の幕が切って落とされた。

このセレモニーに続き、国際会議場では最近の放送メディアの最大のトピックスである「4K・8K ロードマップ進捗と展望」と題した基調講演会が開催された。一人目の講師の総務省大臣官房の吉田審議官は 2020 年に向けた「放送政策の動向と展望」を、二人目の NHK 副技師長の春口技術局長は「スーパーハイビジョン試験放送と東



写 1: 52 回目のオープニングセレモニー



写 2: 大入り満員の基調講演会場



写 3: NHK 副技師長講演より

京五輪に向けての展望」を語り、スカパーJSATの小牧取締役が「当社の4K放送の取り組み」について講演が行われた。この8月、NHKがBSによる試験放送を開始し、民放キー局が12月から開始するとあって、ホットテーマだけに会場は立錐の余地のない大入り満員の盛況だった。

引き続き同じ会場で開かれたもう一つの基調講演は、今年開催されたリオオリンピックに関して、ブラジル最大の放送局“TV Globo”のスポーツテクノロジーディレクターのマヌエル・マリノ氏が「リオ五輪を振り返り、2020年を考える」と題して、NHKの報道技術センター 中継部の東副部長が「リオオリンピック SHV コンテンツ制作を振り返る」と題した実践的な講演を行った。

その他にも、IABMのブルース理事による招待講演「欧州における放送・メディア業界の動向を追跡する」や昨年に続き飯泉徳島県知事による特別講演「災害多発する列島に対する放送とネットの役割」と題した講演など盛り沢山の企画が行われていた。

特に注目したのは、最近の放送メディアの大きな技術テーマになっているIP化に関する特別講演会「IPライブ伝送提案の各方式と今後の展開」である。最近のNABやIBCでも急速に展開している技術潮流IPに関するテーマだけにこちらも満席の盛況だった。現在IP化方式、そこに向かうアプローチはいくつかの提案が併存しているが、今回初めてGrassValeが主導するAIMS¹⁾、Evertsが主導するASPEN²⁾、ソニーが主導するNMI³⁾、メディアグローバルリンクスが提唱するIP-VRS⁴⁾、NewTek提唱のNDI⁵⁾、それぞれの陣営のキーパーソンが一堂に会し、それぞれが提案する方式について講演と討論が行われた。各陣営の講演に続き、朋栄やAIMS Japanも加わり、講師陣と聴講者も交え率直で活発なパネル討論も行われていた。放送メディアが4K、8K化に向かう状況下IP化は必然の流れで、今後SDIと並存、棲み分けつつIP移行が進んでいくと考えられる。そのためには、

1) Alliance for IP Media Solutions
2) Adaptive Sample Picture Encapsulation
3) Network Media Interface
4) IP Video Router System
5) Network Device Interface

現在いささか混戦状況にある方式、提案が統一、標準化されていくことが望ましく、今回のIPサミットとも言えるこのイベントがそのきっかけになることを期待したい。

大会中日には、長い実績があり例年好評な映像シンポジウムが開催された。女子美大の為ヶ谷氏と国重氏のコーディネートにより、最近のメディア動向を捉えた「進化する4K・8K映像コンテンツへの挑戦」と題し、ハリウッド映画からドラマ制作、医療応用まで、4K・8Kの特性を生かした映像活用の新たな展開について、最先端の現場のエキスパートによる講演およびパネル討論が展開されていた。この企画も非常に時機を捉えた興味あるテーマで、大入りの聴講者に深い感銘と大きな刺激を与えてくれた。非常に中身が濃い内容だったが、いずれ本誌でも詳細が報告されると思うのでここでは省略したい。

また展示会場の第8ホール内のシアターでは、クリエイティブセッションが開催され、最近のコンテンツ制作の動向を反映した多種多彩な講演や作品紹介が3日連続で行われていた。初日最終回のNHK制作技術センターの前田氏による「4K HDRへの挑戦」を聴講した。NHK初の4K連続特別制作ドラマ「精霊の守り人」における映像表現への新たな取り組みや制作上の問題などが実際の映像も取り混ぜてわかりやすく話してくれた。第1シーズンは既に放送され、制作途上の第2シーズンが近々放送されるとあり、評判を呼んでいるNHK初の4Kドラマだけに評判になっており会場は大入り満席だった。

今大会の技術動向のポイント

我が国の放送にとって、今年最大の話題は言うまでもなくBSによる4K/8K試験放送である。8月にはリオオリンピックを機にNHKが開始し、12月の電波の日には民放キー局が開始する。本格的超高精細度放送のスタートで、国内だけでなく世界の放送状況にも影響を与えて行くと思定される。今回のInterBEEにおいては、そのような状況に応えるように4K、8K対応のカメラや制作系、ディスプレイなど多くの出展が見られた。もう一つの大きな技術動



写4: IP サミットとも言える各IP提唱陣営が集結した講演会



写5: 8Kをテーマにした映像情報シンポジウム



写6: 4Kドラマ「精霊の守り人」制作報告

向としては、超高精細映像4K、8Kの展開とも連動し、あらゆる機器、システムを支える高画質、高効率の符号化技術、さらに局外だけでなく、局内機器間の配信伝送系にも進んで行くIP化の流れである。前述の特別講演のところでも触れたように、多くの企業が今後のIP化の流れを視野に、その動向に対応する多種多彩な機器やソリューションの展示や提案がなされていた。その他、4Kや8Kと言った解像度だけではなく、画質に大きく寄与するHDR、広い色域への対応、動き画像の品質に関わるHFRなどに応える展示も多くの企業ブースで見られた。展示物は従来以上に多岐にわたり膨大で、十分カバーしきれない点もあるが、筆者の視点で注目した出展物について、次号以降で順次概略を紹介していきたい。

Ph.D. Takehisa Ishida
映像技術ジャーナリスト
電気通信大学特任講師